

# 天馬の記

岡部耕大

51



「映画監督になりたい」との手紙は黒澤明監督に書きたかった。だが、黒澤明監督は手紙に目を通さないのではないかと危惧した。もう「天国と地獄」の撮影に入っていたのではないか。

その頃、デビューしたばかりの岡本喜八監督の「独立愚連隊西へ」を伊万里の映画館で見た。この映画館では新東宝映画「明治天皇と日露大戦争」も見た。初めて天皇を実名のまま登場させ、明治、大正生まれの観客に感動を与えた映画である。鞍馬天狗の嵐寛寿郎が明治天皇を演

は「ヒーローがやって来ない街」であった。石炭ブームで炭鉱のある街には無頼漢が集まる。四つも五つもの組が派手な大立ち回りを演じる。ただ、椿三十郎みたいなヒーローはやって来ない。石油によって石炭ブームが去り、寂れた街からは無頼漢が

の字があった。驚いた。諦めかけていた夏の盛りであった。手紙には「映画は斜陽で東宝では助監督は2年に1人、それも東大を卒業した人しか取らない。諦められたし」といった内容であった。諦めろといわれて諦めるわたしではなかった。その日

この映画の脚本も橋本忍である。大学進学は東京に行く口実であった。勉強には手が付かず、映画ばかり見ていた。親も諦めた節がある。家族で夕食を取っていると、突然親父が「この家には泥棒がおる」といった。母はわたしを睨んでいた。掛けてある親父の背広のポケットの財布から百円札を盗んで、映画ばかり見ていたのはわたしである。「おまえ、今日も映画は見に行ったじゃろが」。どうして

## 岡本監督への手紙

じていて、奇妙な気もした。観客の中には紋付きはかまの人もいた。岡本喜八監督は軽快にテ

ンポよく戦争映画を描いた。まるで西部劇であった。

高校2年の春に出した手紙の作は「日本のいちばん長い日」である。確信している。「脚本が大げさなんだよ」と岡本喜八監督は嘆いていた。しか

わかったのか。松浦の映画館の前の自転車置き場に我が家のボロ口自転車置いてあったそうである。あんなボロ自転車は我が家にはなかった。

「この監督なら返事をくれるかもしれない」。手紙には書きたい脚本の粗筋も書いた。題名

た。裏を返すと岡本喜八と独特

し、あの日だけは大ききでいい。

(松浦市出身)

た。裏を返すと岡本喜八と独特

し、あの日だけは大ききでいい。

(松浦市出身)

(松浦市出身)